2024年2月11日 久宝教会 関西労働者伝道委員会デイ講壇交換礼拝
（降誕節第6主日礼拝）メッセージ

「恵みに生かされ」　　大阪大道教会・鈴木貴博牧師

聖書　ヨハネによる福音書 6章 1－15節

久宝教会の皆様、おはようございます。はじめまして、私は大阪大道教会の鈴木貴博と申します。本日、関西労伝デイの交換講壇により、こちらで礼拝説教を担当する機会をいただきましたこと、感謝申し上げます。昨年4月大阪にまいりましてまだまだ分からない事ばかりですが、どうぞよろしくお願いいたします。はじめに大阪大道教会について少し紹介いたしますと、天王寺にある教会で、最寄りの駅はJR大阪環状線の寺田町駅です。にぎやかな繁華街が近くにあり、美味しい食事を提供してくれるお店が多い事は、嬉しさの反面、誘惑でもあるのが悩ましいところです。

大阪大道教会は、その創立者がかつて刑務所に服役中に、信仰に導かれたという特異な経歴を持つ亀水松太郎牧師と有志により 1928 年 9 月に創立されました。あと 4 年で創立 100 周年を迎えます。いま記念事業に向けて、皆で話し合いを続けているところです。現在の教会の礼拝出席者は 20 名前後といったところです。今でこそ、小さな群れの教会となりましたが、かつては会員数が200名以上あったそうです。当時、多くの方々が亀水牧師を通して、イエス・キリストの御言葉に導かれ、洗礼を受けました。その勢いは、今回の聖書の場面にあったような、－さすがに5千人とは比べようもありませんが―そのような姿を彷彿とさせるものが、当時の写真の賑やかな様子から偲ばれます。以来、大阪大道教会は幾多の困難を経験しながら、今日まで歴史を重ねてまいりました。

こちらの久宝教会におかれましても、歴代信徒の方々の多大なご苦労とともに、その歴史を積み重ねて来られた事と思います。たとえ歴史の事情は異なれども、ともに主イエスを道しるべとして仰いで来たその歩みは同じであります。それでも時代の変化と共に、今や教会のあり方も変化を求められているのかも知れません。現代という時代、私たちが今生きている世界をどう捉えるべきなのか・・・こうした検証の取り組み無しに、今、教会が直面している宣教の課題を解決する道筋を見

つけることは困難でしょう。けれども、主の恵みに生かされている命の貴さを伝える教会の使命というものが、古代より現代に至るまで、変わらないものである事は申し上げるまでもありません。その事を踏まえて、今日の五千人に食べ物が与えられる、この有名な奇跡の物語から、現代に生きる私達が何を糧として得るべきなのか、あらためてご一緒に考えてまいりたいと思います。

今、「有名な奇跡の物語」と申しました。しかし、そもそも有名である割には、果たして十分に理解されているかどうかはまた別の話ではないでしょうか？ 例えば、皆さんはこの奇跡について、信徒でない方にどう説明されますか？ 現代に生きる私達が、科学や理屈で説明出来ないこうした奇跡をどう受け止めたら良いのか？どう人に伝えたら良いのか？ こうした問いがつまずきとなり、ある人たちにとっては、聖書に馴染めなかったり、あるいは聖書から遠ざかってしまったりする一因ともなる場合があるのではないかと思います。そんな私達の奇跡に対する態度は、大きく分けて二通りあるように思います。

① そのまず一つ目は、こうした奇跡を古代の人々の妄想あるいはおとぎ話のように、現代の私達とは無関係のものとして傍観者のように眺める姿勢です。つまり、実は五千人の人々が満足したのは実際の食べ物によってではなく、イエスの存在によって精神的に満たされたのだと、その事を聖書は「満腹した」と言っているのだと、勝手に現代の私達が「象徴的」に解釈してしまうことです。これは、いかにも現代人らしい、説明出来ないものについては判断を停止してしまう、「奇跡」を否定する姿勢に他なりません。そればかりか、この「奇跡」を「象徴」としてしまった時点ですでに私達はここから何も汲み取れず、古代の人々やイエス達と無関係で遠ざかった存在となってしまいます。

② 二つ目は、「聖書に書いてあるから」と、分からないままに無理やり信じ込もうとする姿勢です。いえ、決してその事自体間違っているとは申しません。聖書には真実の事しか書いてないのですから。ただ、それでは果たして私達の糧となっているかどうか、という点が疑問なのです。食べ物をよく噛んで（咀嚼して）呑みこまない事には、味わいにも栄養にもならないように、ただ丸呑みするだけでこの奇跡物語を味わったことになるのかどうか、という事です。

消化不良だって起こしかねません。

いずれの場合におきましても、奇跡を前にし、躓いている事に変わりはありません。では聖書は、五千人の奇跡の物語を通して、今の私達に何を伝えているのか？古代の人々には伝わったものが、現代の私達にはもはや伝わらなくなったとでもいうのでしょうか？ 実は、この奇跡物語は聖書において初めて書かれたものではありません。聖書が書かれる以前からあった古い伝承だそうです。それが残り、聖書にこうして伝わりました。それならば、聖書にこのような奇跡物語が伝えられたのはなぜでしょう？ 古代の人がこういう奇跡を、ナイーブに信じていたからでしょうか？ そんな事ではないでしょう。昔の人だってそんなナイーブな人ばかりでは無かったはずです。私達と同じ人間です。現代のような科学は無くとも、あくまでこの世の常識の中で生きていた人達です。その点では昔の人々も、今の私達も変わろうはずはありません。

それにも拘らず、このような奇跡物語が伝えられて来たのはもちろんそこに伝えるべき大切な事があったからです。そしてそれを大切に守り伝えて来たからこそ、聖書にも取り上げられたのです。その事を表しているかのように、四つの福音書全てがこの五千人の供食の奇跡を取り上げています。では、そうまでして、この奇跡が今まで大切に伝えられて来たのはなぜでしょうか。

それは、私達人間が、奇跡を一方で「あり得ないとか」「ばかげている」と思いながら、他方、心のどこかでそれを願っている生き物だからだと思います。私達はこの世の常識の中で生きていると先程申しました。しかしその常識によって苦しめられるのもまた、私達人間であります。私達は自分の人生が順風満帆であるうちは、常識の中で生きている事を疑いません。しかし人生が困難に見舞われた時、私達はそれまでの常識の世界に耐えられなくなります。例えば病気です。現代医学の常識では治らないと、厳しい現実を突きつけられる時がそうです。そんな時、私達は奇跡を求めます。苦しい時、残酷な常識の中、奇跡を期待するのも又、事実であります。そのように私達は一方で奇跡を否定し、一方で奇跡を望みます。そんな矛盾を抱えた、この世に生きている私達、そんな私達が生きるために、生きる糧を勇気を得る為にこうした奇跡物語があります。

今日の聖書にも、この世の常識の中で生きている私達と同じような人達が出て来ます。例えば、イエスの弟子達です。実は、この奇跡物語を理解する鍵は、この私達のような弟子達と、イエスとのやりとりの中にあります。その事を理解するために、ざっと、今日の物語を振り返ります。イエスは、ガリラヤ湖、すなわちティベリアス湖の向こう岸に渡りますが、大勢の人達が後をついて来ました。まず、ガリラヤ湖をわざわざ「ティベリアス湖」と言い直しているのが目を引きます。そう呼ばれているのは、この湖の西岸に「ティベリアス」というローマ風の都があったからです。当時ユダヤ人はローマ帝国の支配下にありました。「ティベリアス」という名前は、当時のローマ皇帝の名前です。そして、この都を建てたのは、当時のユダヤの王ヘロデ・アンティパスでした。ヘロデは、ローマのご機嫌を取るために、「ティベリアス」という名のローマ風の都を建てたのです。こうした事からもわかりますように、当時ユダヤの人々はローマの支配に苦しんでいました。イエスについて来た大勢の人は、そんな状況を何とか変えてほしいと望んでいたのです。人々はイエスこそはこの状況をひっくり返してくれる王だと信じました。つまり、人々はイエスに政治的な王としての役割を期待していました。人々がそう信じたのは、彼の癒しの業を見たからです。その癒しの業を見て、またその話を聞いて、ああ、この人こそ真の王に違いない・・そう思って、五千人を超える人達があとをついて来たのです。

イエスはそれを見て、弟子の一人フィリポに尋ねます。「どこでパンを買って来て、この人達たちに食べさせようか」、そう尋ねたのは、フィリポの信仰を試みるためでした。するとフィリポは「200デナリオン分のパンでも足りないでしょう」と言いました。つまり、「無理」だと答えたのです。200デナリオンがどのくらいの金額か・・・・ブドウ園の主人が、働き手を雇う、あのたとえ話を思い出していただきたいと思います。あの話では、主人が労働者に１日の労働の賃金として、1デナリオンを払いました。ちなみにこの1デナリオンがどれくらいの金額かというと、バケツ1杯の穀物が買えるくらいのお金です。という事は、200デナリオンは、200日分の労働の給料という事になります。大変な金額です。しかし、「それでも足りないでしょう」と、フィリポはあくまでも世間の常識に則ってイエスに答えたわけです。自分達の分だ

けでも精一杯なのに、とてもそんなお金は用意できなかったからです。フィリポは本音では、「イエス様、とても無理です。もう人々を解散させて下さい」と思った事でしょう。まあ、誰でもそう考えると思います。常識的に考えて、そんな量の食べ物などすぐ用意なんか出来ません。解散して皆を帰らせた方が理にかなっています。誰でもそう思います。もし私達もそう思うのだとしたら、私達も弟子達と同じです。それは、彼らも私達と同じこの世の常識で動いているからです。しかしそれは無理のない事かも知れません。

何しろ自分達の分だけでも精一杯なのに、イエスはこんな大勢の分のパンを買うなんて言うわけですから、フィリポにしてみればとんだ無茶ぶりというものです。弟子達は、いくらイエスの言葉とはいえ、「先生、そんな無茶を言わないで下さい」と、心の中では抗議しているのです。また、弟子のアンデレがこう答えました。「ここに大麦のパン５つと魚２匹とを持っている少年がいます。けれども、こんなに大勢の人では、それが何になるでしょう。」・・・こう答えました。考えるまでもありません。もちろん足りるわけがありません。とても無理です。ここまでが、弟子や私達の常識で理解出来る範囲の話です。けれども次のイエスの行動が、私達の常識を置き去りにしてしまいます。

イエスが天に祈り、パンと魚を分けたところ、すべての人が食べ満腹しました。しかもパンのくずを集めると、なお１２のかごが一杯になったのです。この１２という数はイスラエルの部族の数を表しています。つまりこれを書いたヨハネは、あの出エジプトの時、モーセを通して神がマナという天からのパンをイスラエルの人々に降らせた、あの同じ奇蹟が、イエスによって行われたと言いたいのです。しかもイエスはやがて、自ら命のパンとしてその命を差し出すわけですから、モーセをしのぐと言いたいのです。それにしても、私達は、こんな事は常識では到底信じられません。それは弟子たちも同じでした。

この話を聞いた古代の人達もきっとそうだったでしょう。ではこの奇跡の業は何を伝えているでしょうか。ここで伝えられている奇跡の業とは、何も手品や魔法のように人々を驚かせるためのものではありません。むろん、そんな小手先の手品で、イエスの事を信じさせようとしているわけでもありません。この奇跡が伝えたいの

は、もっと大きな事です。それは、イエスの恵みの豊かさという事です。それだけではありません。この奇跡をもたらしたのは、恵みを共に分け合おうとする愛だと言う事、つまり、イエスの恵み豊かさと、分け合おうとする愛が、奇跡を生んだという事です。イエスが弟子達の心配をよそに五千人との食事を望んだのは、この恵みを分け与える愛ゆえでした。イエスの、人々と共にあろうとする愛の深さ・大きさが奇跡を生んだ、この事が大切なのです。つまり奇跡とは、決して人をあっと驚かせる手品や魔法のようなものでもなければ、偶然起こった、人間の常識を超えた現象などでもないという事です。奇跡とは、イエスの恵みと愛によって、起こるべくして起こった必然の出来事だったという事です。そうであるならば、おのずとここで一体何が起きたのか、弟子たちと同じこの世の常識の中で生きている私達にも十分納得出来るのではないでしょうか。

確かに、最初は、パン5つと魚2匹しかありませんでした。しかしイエスの愛を通して皆と分け合った結果、皆、満腹したどころか、12のかごが一杯になるほどあり余ったという事です。このあり余るほどのイエスの愛が、弟子達と五千人に何をもたらしたのか。そこには確かに奇跡が起きました。イエス達の持っていた食べ物は勿論、恐らくここに居合わせた誰もが、自分の持っていた食べ物を惜しみなく差し出し、分け合ったとそう考える事も出来ます。それがイエスの奇跡として、長く語り継がれた。それが聖書を通して、今も私達に伝えられているという事です。「何だ、そんな事か」、そう思われるかも知れません。しかし先ほども申し上げた通り、イエスの奇跡とは決して手品ではありません。ですから手品の種明かしを知った時のようにがっかりしてはならないのです。奇跡の重要な意味はむしろ、そこからです。誰もが持てる物を差し出し、分かち合う事がいかに奇跡に近い、困難な事であることか。私達はこの「常識」の現実の中で、その事をいやというほど痛感しているのではないでしょうか。

例えば、貧しい人に対して1円の寄付すら惜しむのに、ギャンブルに使う1万円を惜しまない人は世の中に沢山います。そもそも世界全体がそうです。今、世界経済では、グローバリゼーションがさかんに叫ばれています。一昔前、投資とは、モノづくりや、人に対してお金を託すものでした。しかし、今グローバリゼーションと呼ば

れているものは、ごく一部の富裕層が、モノではなく、お金にお金を投資するという、金融ゲームのようなまるで巨大なギャンブルのようなものになっている。その結果、富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなるという世界規模的な貧富の差が広がっています。そしてこの貧富の差が、テロリズムを引き起こす一つの原因ともなっております。私達の暮らすいわゆる「常識」の世界とは、そのようにもはや耐え難いものになっていると言えるのではないでしょうか。

この事を今日の聖書に照らし合わせるならば、こうした富を一部の人が握りしめるのではなくて、そのわずかでも他の人と分け合おうという気持ちが起こりさえすれば、かなりの人が飢餓から救われます。もしそうなれば、それこそ奇跡です。今日の物語とは、正にその奇跡が起こったという事です。もちろんその奇跡を起こしたのは、イエスの、分け与えようとする愛でした。その愛が人々の間に広がった。私達はこの奇跡をそう受け止めるべきなのではないでしょうか。弟子達のように「パンが5つしかない。しかし食べる人は5千人いる。とても無理だ」と諦める事はたやすいことです。そして出し惜しみをしてしまうならば、皆飢えてしまいます。私達があくまでその常識の世界の中であきらめてしまうなら、この世は決して変わりません。

しかし、それとは逆に、食べる人が5千人いる。しかしパンは5つしかない。何とかしなければ!・・・皆がそう思う時、世界は変わるのだと、一人一人の力はわずかでも、一人一人が動けば奇跡は起こるのです。イエスの愛の奇跡は、私達にそう教えて下さっています。ならば、ここで示された奇跡を通して主は、私達にも、分け合う事、助け合う事の貴さと、その喜びを教えてはいないでしょうか。私たちはこの世にあって、すでに奇跡を知っています。それというのも、その証しとして教会があるからです。つまり教会を通じて、私達は、主イエス・キリストの恵みのもとに生かされているという奇跡を知るのです。そして主は、教会を通して、私達に与えられた恵みを惜しまず分け合う事を望んでおられます。主の愛がそう望んでおられるのです。

私達の命が恵みによって与えられたものならば、私達の命を生かすものも、すべて恵みによって与えられたもののはずです。私達が自分で手にしたと思っているものも、すべて恵みの賜物であります。その事を信じ、主にならって私達が恵みと愛

を分け合うならば、今、私達にも奇跡は起こり得ます。この世もまた、変わります。そのように変わった世界こそ、神の国であります。私達の一人一人もこの奇跡のわざが行われるために、この世と教会に集められたのであります。イエスは弟子達に「少しも無駄にならないように、残ったパンの屑を集めなさい」と言われました。その通りです。私達はいただいた主の恵みを少しでも無駄にしてはならないのです。主の愛のもと、私達はその貴重な恵みに生かされた者として、奇跡を諦める事無く、神の国の希望を持って歩むべきなのです。